

名作文庫通信

2022年 夏号



夏季特集

短編小説の魅力

おもしろく、親しみやすい文学



【ジム・スマイリーの跳び蛙】

マーク・トウェイン/著 柴田元幸/訳 新潮文庫/刊

マーク・トウェインの名を一躍世に知らしめた表題作をはじめ、生涯にわたって発表した短編小説、エッセイ、コラム記事の中から、トウェインの真骨頂である活気に溢れ、ユーモアと諷刺に満ちた作品全13編を新訳で収録する。(TRC MARCより)



【小僧の神様・城の崎にて】

志賀直哉/著 新潮文庫/刊

志賀直哉の長編小説は『暗夜行路』一作のみ。あとはすべて短編だ。作品には、主人公が葛藤を経て調和に至る感情の起伏が簡潔に描かれている。『城の崎にて』では、三つの小動物の死と出会い、生きることと死ぬこととは、両極ではなく同一だという認識に達する。谷崎潤一郎は『文章読本』の中で、小動物の描写部分をとりあげ、「『華』を去り『実』に就いた名文」と絶賛している。全18編を収録。

「名作文庫」とは？

下井草図書館では文学、哲学、思想、歴史などの名著名作を文庫版・新書版で集め、「名作文庫」としてご紹介しています。



今月の1冊 心の旅を描く物語

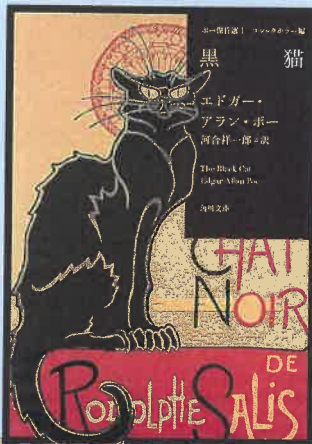


【藤十郎の恋・恩讐の彼方に】

菊池寛/著 新潮文庫/刊

京の歌舞伎役者で名人といわれる坂田藤十郎は、不義の恋に落ちる男を演じるにあたり、その心境を知ろうと、茶屋の女房お梶を口説くのだが……(『藤十郎の恋』)。劇作家でもある菊池寛の作品には明確なテーマがあり、登場人物は激しく葛藤し、物語はドラマティックに展開し、意外な結末を迎える。わかりやすく、文句なく面白い。初期の作品から歴史物10編を収録。

新着本 新しく入った本のご紹介



【黒猫】

エドガー・アラン・ポー/著 河合祥一郎/訳 角川文庫/刊

おとなしい動物愛好家の「私」は、酒におぼれ人が変わり、可愛がっていた黒猫を虐め殺し、妻も手にかけ遺体を地下室へ隠すが…。戦慄の復讐譚「黒猫」を含むゴシックホラーや詩など全14編を収録した新訳・傑作選。(TRC MARKより)



【変身】

フランツ・カフカ/著 川島隆/訳 角川文庫/刊

「おれはどうなったんだ？」平凡なサラリーマンのグレゴールはベッドの中で巨大な虫けらに姿を変えていた。変身の意味と理由が明かされることはなく、不条理な物語が展開していく。最新のカフカ研究を踏まえた新訳。(TRC MARKより)

編集後記

短編小説の中でいちばん好きなのは、中島敦の『弟子』だ。孔子の弟子、子路が主人公。読むたびに感情移入してしまう。遊侠の徒であった子路が、評判の高い学者をやりこめてやろうと、左手に雄鶏、右手に牝豚を引提げ、孔子の家にのりこんでいく冒頭から、仕官した国の乱に巻きこまれ生涯を終えるまで、すべておもしろい。繰り返し、何度も読むことができるのは短編小説だからだ。

発行:杉並区立下井草図書館
杉並区下井草3-26-5

